掲載日:2011年06月18日,面名:S206X0,記事ID:K20110618S206X0050
(C)河北新報社

石巻・大川小　２人のあの時と今

心刻む　伝える

東日本大震災で児童108人のうち74人が死亡・行方不明となった石巻市大川小。多くの友達を奪った津波被害は、無事だった児童の心にも深い傷を負わせた。18日の百か日を前に、2人の子どもの「あの時」と「今」をたどった。

僕の経験 備えに生かして

――6年 只野 哲也君

休み時間のサッカーやスポーツ少年団の柔道の練習再開に向けた腹筋、背筋運動。大川小6年の只野哲也君(11)は、震災前の日常を取り戻しつつある。少し誇らしげに「友達には『最強のディフェンダー』と呼ばれています」と言う。

あの日、大川小から北上川方面へ移動する途中で津波が押し寄せてきた。懸命に走り、裏山を登りかけたところで波をかぶった。土砂に埋まったところを、同級生が助け出してくれた。

父英昭さん(40)、祖母アキ子さん(64)とは再会できた。でも母(41)と祖父(67)、妹で3年生だった未捺さん(9)が津波の犠牲になった。

震災直後、避難所にいたころは、「夜が怖かった。よく妹や友達と遊ぶ夢を見た」と言う。

未捺さんは何をするにも哲也君と一緒。面倒見がよく、ゲームをしてもこっそり負けてくれる優しいお兄ちゃんのことが大好きだった。夜、うなされる息子の姿に英昭さんは心を痛めた。

仮設住宅に移った今は、家族が運転する車で仮校舎になっている飯野川一小へ通う。英昭さんは「ずっと一緒だった友達や下級生と離れ離れにしたくない」と考えている。

震災の経験を振り返るのは、大人にとってもつらく、難しい。現場で津波に襲われ、助かった児童は哲也君を含め4人だけ。哲也君は「自分は普通の人が体験しないことを体験した。地震を体験していない人にも、知ってほしい」。そんな思いから、なるべく話をしてきた。

「堤防を高くするとか、避難場所をあらためて考えるとか。備えに生かしてほしい」。自分の言葉できっぱりと語った。

英昭さんが見守る中、元気に自転車をこぐ哲也君＝16日、石巻市

あふれる友達との思い出

――当時6年生の女子

被災当時6年生だった中学1年の女子生徒(12)が、涙を見せなくなって3カ月になる。地震から約20分後、車で迎えに来た母親と大川小を後にした。「残った子はほとんどが助からなかったらしい」。そんな情報が流れた震災翌日から、人前では泣かなくなった。

増えたのは友達一人一人の話だ。「○○君はあのアイドルが好きだったんだよ」「本当はそういう面を持った子なんだ」。母親(44)との会話では、これまで話題になることが少なかった男子の話や、親しい女子の意外な姿も飛び出す。

「自分が友達のことも伝えていかなければならないと二度と起きてほしくない」。母親は娘がそう話すのを何度も聞いた。取材に応じ、地震直後の校庭の様子などを証言するのもそうした思いからだ。

あの日、防災無線は聞いたこともない高さの大津波が来る恐れがあると伝えていた。

「俺たち、やばいんじゃない」「家族は大丈夫かな」。同級生からそんな声も上がった。対応を話し合う先生たちの輪からは、男性教諭が「山だ、山だ」と何度も言うのが聞こえた。

普段は泣かない方だが、地震当日は直後から涙が止まらなかった。「数日前に見た夢を思い出し怖かった」と振り返る。

教室でわいわいとやっている友達。黒い渦のようなものにのみ込まれ、だんだんと人がいなくなる。自分は別な空間にいて、助けに行きたいけど近づけない。そんな夢だったという。

大川小から自宅に向かう車の中でも、泣きじゃくりながら「学校に戻る。友達が心配」と母親に訴えた。母親は「先生もいるし大丈夫」となだめるしかなかった。

大川中に進んだ同級生は、親に迎えに来てもらうなどして助かった4人。一緒にいると、かつての同級生の話題が頻繁に出てくるという。

大川小の被害　3月11日の地震直後、児童はいったん校庭に避難。津波が来る直前に北上川の橋のたもとにある小高い場所へ移動する途中に津波に襲われた。地震発生から40分以上が経過していたとみられている。児童108人のうち68人が亡くなり、6人が行方不明。教職員も当時学校にいた11人のうち9人が死亡、1人が行方不明。2階建ての校舎は屋上まで水をかぶった。校庭などに避難してきた住民も多くが犠牲になった。